

## ベールにおける懐疑主義的無神論の位置

ジャンニ・パガニーニ  
津崎良典（訳）

無神論の歴史に関する最近の研究は、無神論を形而上学的概念として厳密に概念化すること（無神論とは超自然的な作用者としての第一原因の存在を否定することである）<sup>1</sup>から次第に距離をとり、その結果、不信仰（*incroyance / unbelief*）というより緩やかな概念を採用しはじめている。じっさいに例えばジョルジュ・ミノワ〔Georges Minois〕の『無神論の歴史〔*Histoire de l'athéisme. Les incroyants dans le monde occidental des origines à nos jours*〕』<sup>2</sup>においては、この術語のもとに、宗教的な次元における非・順応主義、異端、あるいは不敬虔という非常に多岐にわたる事象が一括りにされている。ミノワとは異なる観点に立脚する W・シュレーダー〔Schröder〕によれば、このような「間口の広い〔*élargie*〕」アプローチのしかたは、例えばオランダのウィーブ・ファン・ブンゲ〔Wiep van Bunge〕やミヒール・ウィーレマ〔Michiel Wielema〕<sup>3</sup>といった哲学史家（ミノワは哲学史家ではない）をも説得させることになった。しかも或る意味では、無神論を「広義論的に〔*latitudinaire*〕」概念化することは、古典主義時代にその先行事例が認められる。そしてそれは、イエズス会士ガラス神父の『当今才士達の奇妙な学説〔*La doctrine curieuse des beaux esprits de ce temps, ou prétendus tels*〕』（パリ、1623 年）だけに限らない。なるほどそのなかで「無神論」という表現は、教会の教義を単に批判するというものから流神の言葉を吐くとか神を真面目に否定するとかいうものまで含めて、カトリックの教義に対立する非常に多岐にわたる立場を指し示している。この著作は、論争書に典型的な特徴をしており、自分とは相容れない立場を攻撃するという目的のためにあらゆる手段を用いるきらいがあるため、歴史学的な観点からすれば、あまり真に受けることのできないも

<sup>1</sup> この概念はまた、例えば J. C. A. Gaskin, *Varieties of Unbelief from Epicurus to Sartre*, New York-London, 1989, p. 2 にも見出される。

<sup>2</sup> 原著は Paris, Fayard, 1988。また同じ著者の *Dictionnaire des athées, agnostiques, sceptiques et autres mécréants*, Paris, A. Michel, 2012 も参照のこと。この書物ではその題目からしてこのような「広義」の受け止め方が明示されている。それと同様に、狭義における無神論よりも不信仰と異端のほうに軸足をおくのが以下の研究である。Cf. F. Berriot, *Athéismes et athéistes au 16<sup>e</sup> siècle en France*, Lille, Cerf, 1976 et D. Wootton, « New Histories of Atheism », in M. Hunter and D. Wootton (éds), *Atheism from the Reformation to the Enlightenment*, Oxford, Oxford U.P., 1992。「正統派の余白〔*marges de l'orthodoxie*〕〕については、以下の論集も参照のこと。Cf. R. D. Lund (éd.), *The Margins of Orthodoxy. Heterodox Writing and Cultural Response, 1660-1750*, Cambridge, C.U.P., 1995。「公言した」無神論なのか「身を隠した」無神論なのかという問題については、以下の論集を参照のこと。Cf. A. Staquet (dir.), *Athéisme dévoilé aux temps modernes*, Bruxelles, Éditions de l'Académie Royale de Belgique, 2013。

<sup>3</sup> W. Schröder, « *Hydra multiceps ou negatio existentia dei ?* Garasse, Voetius et le concept d'« athéisme », dans S. Taussig (éd.), *La question de l'athéisme au dix-septième siècle*, Turnhout, Brepols, 2004, pp. 31-45。

のである。さきに言及したような「間口の広い」アプローチとしてより真剣に受けとめられるのは、あらゆる流派の神学者たちのあいだで非常にひろまっていた考え、つまり、神の摂理による世界の統治の否定は基本的に無神論という形式に帰着する、という考えである。ただし、このような神の統治が否定されるからといって、神の存在そのものまでもが疑問視されるわけではない。〔いずれにせよ〕こうした理由からエピクロス主義者たちは（そしていずれはスピノザ主義者たちも）無神論者として見なされることになる。ただし、エピクロス主義者もスピノザ主義者も一つないし幾つかの神格<sup>ディヴィニテ</sup>の存在を否定することはなく、摂理という概念を破棄することだけに留まるのだが<sup>4</sup>。

最近の研究では、無神論という概念をいっそう柔軟なしかたで、また陰影に富んだしかたで用いることが提案され始めている。それはマイケル・ハンター〔Michael Hunter〕とデイヴィッド・ウォートン〔David Wootton〕が1992年に出版した『宗教改革期から啓蒙時代までの無神論〔*Atheism from the Reformation to the Enlightenment*〕』という論文集においてである。しかしこのように不信仰〔incroyance〕という概念を緩やかに用いる提案としては、『十六世紀における無神論者と無神論〔*Athées et athéismes au XVI<sup>e</sup> siècle*〕』の著者であるF・ベリオ〔Berriot〕のほうが彼らよりも先である。

無神論を厳密なしかたで形而上学的に概念化するのをやめるということに関しては、現在とりわけW・シュレーダーから反論が寄せられている。彼は、哲学的地下文書に関する著作『無神論の起源〔*Ursprünge des Atheismus*〕』<sup>5</sup>のなかで、無神論を厳密かつ哲学的に捉えることを提唱したわけだが、それによると無神論は、神と同一視される第一原因の存在を単に否定することに等しい。ついで彼は、この著作に比べれば規模の小さい論考のなかで<sup>6</sup>、ガラスの「論争的で厳密とはいえない用法」に、ガラスと同時代であるが、はるかに厳密な議論の組み立て、つまりヴォエティウスによるそれを対立させることで、術語にかかわる問題と歴史学上の方法論にかかわる問題とを改めて取り上げた。オランダの神学者ヴォエティウスはその論考『無神論について〔*De atheismo*〕』（1639年）のなかで、「無神論という広義論的な概念は慎重に用いたほうがよい」<sup>7</sup>としているが、それはガラスの著作のうちに頻繁に見出される中傷に起因する混乱を退けるためである。じっさいにヴォエティウスによる体系的な分類のうちには無神論の亜種が非常に多く含まれているが、この分類は無神論をとりわけ二つの基本的なカテゴリーに前もって区分することを前提にしている。それは一方で、広義における無神論と呼べるものであり、そのうちには幾つかの形態（実践的で間接的な無神論、そして〔本来はそれを狙っていないのに〕結果的に無神論になってしまうもの、自由思想、ルキアノス主義など）が含まれる。他方でそれとは反対に、形而上学的ないし哲学的な概念に厳密に対応するカテゴリー、つまり「本来

<sup>4</sup> とりわけ以下を参照せよ。Cf. Hans-Martin Barth, *Atheismus und Orthodoxie. Analysen und Modelle christlicher Apologetik im 17. Jahrhundert*, Göttingen, Vandenhoeck und Ruprecht, 1971, *passim*.

<sup>5</sup> W. Schröder, *Ursprünge des Atheismus. Untersuchungen zur Metaphysik- und Religionskritik des 17. und 18. Jahrhunderts*, Stuttgart, Frommann-Holzboog, 1998.

<sup>6</sup> W. Schröder, *art. cit.* また、シュレーダー論文を所収する論集 *La question de l'athéisme au dix-septième siècle* に所収されている拙論 « Un athéisme d'ancien régime ? Pour une histoire de l'athéisme à part entière », pp. 105-130 も参照のこと。

<sup>7</sup> W. Schröder, *art. cit.*, p. 36.

的に思弁的な無神論と呼ばれるもの」があり、それは「神は存在しないということに深く説得された」人々の意見のことである。本当のところヴォエティウスは（同時代の大半の神学者のように）、「本来的に無神論と呼ばれるもの」は存在しない、というのもそれは神に関してもたれる自然的かつ生得的な認識の存在を否定することに帰着するから、と考えている。しかしながら、そしてここでは或る種の内容空疎な集合が問題になっているとしても、この「思弁的な無神論」ということで、十分に限定された概念的な枠組み、しかも、無神論に関する厳密かつ哲学的に正確な概念に対応する枠組みが私たちには与えられるのだ<sup>8</sup>。

したがってここまでの簡単な導入によって、無神論については二つの論争があるということが私たちには知られる。一方は十七世紀における論争であり、他方は十八世紀における論争である。ヴォエティウスの分類を参照しながらシュレーダーは、無神論について「限定された」概念を練り上げるべくどちらの論争をも乗り越えようとしている。この「限定された」概念というのは、古典主義時代の人間学とも（文化やインテレクチュアル・ヒストリーを対象とする歴史家というより）哲学史家に要請される場所とも両立する。しかし全体の枠組みは、ヴォエティウスという試金石とは別の試金石を問題にするやいなや非常な変化を被ることがある。これから私たちは、ベールによって無神論の分類として提案されたものが、概念的な厳密さという基準に込めると同時に、さまざまな様相を示し、また、ヴォエティウスが考えていたものよりはるかに変化に富んだ現象を記述するのを可能にしてくれることを見ていく。とりわけロッテルダムのこの哲学者が自分の参照枠のうちに、内包量の豊かで「近代的な」概念、つまり懐疑主義的無神論という概念を導入したことを確認していく。私たちがここでわけても関心をよせるのはこの概念なのである。

しかしこの点に傾注するまえに、ベールが無神論に払った注意がどのような動機からで、また、どのような内容のものであったかを少しばかり見ておくのがよいだろう。ここでは、私たちがこれまで行ってきた研究ならびに最近の〔他の研究者による〕研究の成果を要約するというしかたで見えていく。

ベールは無神論を偶像崇拜ないし迷信盲信よりは好ましいと判断することで、それを特異なしかたで再評価している。ただしこの再評価は、背徳ないし放蕩というお決まりの非難を免れた道徳的な無神論者という人物像に立脚しているかといえ、それほどでもない。むしろそれは、神を否定する者がまさしく「思弁的な無神論者」とされるかぎり、このような人物が体现する思想と哲学の本当の中身を認めた上でのことである。ベールはヴォエティウス（ベールはこの人物のことを知っていたし、彼の著作を引用している）<sup>9</sup>のテーゼとは反対に、これらの無神論者を包含する「集合」は必ずしも「内容空疎」ではな

<sup>8</sup> それがシュレーダーの見解である。しかし「近代初期において無神論は非常に周縁的なものである」と述べられている。そういわれるのは、十七世紀において（狭義における）無神論を題材とする著作が半ダースしかないから。

<sup>9</sup> 『田舎の人の質問への答』第三部第13章（OD III p. 930b）。ベールはとりわけ自身も引用しているヴォエティウスの「思弁的な二ハ、神ハイマサスト固ク確信スル無神論者ハ一人モイナイ」〔野沢協訳、『ビエール・ベール著作集』第八巻所収、法政大学出版局、1997年、49頁〕という考えを参照している。

いと考えていた。それどころか「無神論を掲げるエリート集団」<sup>10</sup>が存在することを認めていた。この集団のなかでもベールにとってもっとも代表的な人物がスピノザである。ベールによれば、このことはスピノザの完全無欠な道徳上の振る舞いからもその洗練された哲学的な思索——たとえベールの目には間違ったものとして映ったとしても——からも言えることである。つまりスピノザはすぐれて「体系的な無神論者」であり、なかば実在の、しかしなかば虚構の〔古代ギリシアの人物である〕ラムプサコス出身のストラトンに比せられるほどである。ちなみにこのストラトンについてベールは、もっとも整合的な自然主義を模索する二人の若きアテナイ人のあいだで持たれた想像上の対話——『続・彗星雑考』〔以下、*C.P.D.*と略記〕のなかに出てくる——において、その体系を再構築して記述している。

まず次のことを指摘しなければならない。ベールにとって思弁的無神論の定義は、シュレーダーがそう考えているのとは違い、「神は存在しない」といった「破壊的な爆発力をもった」命題を単に掲げることに約言されるわけではない。そうではなくて、ロッテルダムこの哲学者にとって無神論には複数のレベルがあり、或る意味でそれは多かれ少なかれ多義的になるし、場合によっては多かれ少なかれ狭義的になるのである。少なくともこのことは、無神論の否定である有神論もまた複数の解釈を受け容れるということから論理的に導き出さうな結論である。有神論もまた多かれ少なかれ多義的な意味で解されるなり、狭義的な意味で解されるなり、それに応じてその中身が変化するのだ<sup>11</sup>。

ベールは『続・彗星雑考』のなかでも『田舎の人の質問への答』〔以下、*R.Q.P.*と略記〕のなかでも頁数を当てつつ、神格に関連するあれこれの概念、もう少し的確な言い方をするなら、第一原因に関連するそれは、一つの「一致点」ないし「統一点」に収斂しうるものなのかどうかを自問している。そして直ちに次のことを付け加える——無神論者は、或る一つの形而上学的な第一原因が存在するという考えを有神論者と共有しているが、この第一原因を物質、自然ないし必然性というものに同定しているだけなのだ、つまり、とりわけキリスト教的な意味における神格に固有なものとされてきた人格的、道徳的、超自然的ないし精神的な属性を第一原因というものから削ぎ落としているだけなのだ、と。ベールは『続・彗星雑考』のなかでも非常によく知られた箇所、神という観念に関する「万人の一致」〔*consensus gentium*〕を弱体化させようとして、無神論者と有神論者の対立を性急にも「言葉の争い」〔*dispute de mots*〕に帰着させている。じっさいに無神論者と有神論者は原因ないし第一原理にどのような意味を与えるかで袂を分かたが、両者はともに原因ないし第一原理の存在を認めているのである<sup>12</sup>。第一原因は存在するという断定は、或るジャンルの境界線を規定するだけのものであり、逆説的にも有神論と無神論はこのジャンルの一種なのである。後者の種類、つまり無神論のほうが、よりいっそう包括的な様相を呈しており、したがって前者の種類、つまり有神論よりも多岐にわたり変化に富んでいる<sup>13</sup>。この文脈においてベールは弁証法的な道具立てをどこか安易なしかたで用いて

<sup>10</sup> G. Mori, *Bayle philosophe*, Paris, Champion, 1999, p. 206（無神論という事象の分類に関しては、214 頁から 215 頁を参照のこと）。

<sup>11</sup> これらの問題については拙著で分析した。Cf. G. Paganini, *Analisi della fede e critica della ragione nella filosofia di P. Bayle*, Florence, La Nuova Italia, 1980, chap. VI, 3, pp. 290-312.



おり（それは「盲従的な〔*implicite*〕」無神論、あるいは「本来はそれを狙っていないのに」  
「結果的に」無神論になってしまうものを告発することであり、このような告発はヴォエ  
ティウスにもみられる）、また、伝統的には有神論者とみなされてきたとりわけ古代の数  
多くの哲学的立場にこの道具立てで切り込んでいる。そしてベールが敵対するところの多  
かれ少なかれ「広義論的な」思潮については、これを（盲従的なものであるにせよ）無神  
論のほうへ押しやるということをする。というのもそれは、まさしくこのような思潮が神  
格についてつねに示す自然主義的なアプローチのためである。

さらにベールは、神格の存在を受け容れはするが、しかしそれに人格、自由、摂理、慈  
善などの性質を付与することは認めない幾人かの哲学者を「盲従的な」無神論者のうちに  
数えあげている。ようするにベールにとって（狭義における）有神論と（広義における）  
無神論を線引きするためには「形而上学的」属性よりも神格の「道徳的属性」のほうが重

<sup>12</sup> 『続・彗星雑考』第20章：「『普遍的で永遠な第一原因があり、それは必然的に存在し、神と呼ばれるべきだ』というテーゼには、無神論者として一人の例外すらなく、正統派の全員と共に署名しよう。ここまでは簡単で、言葉尻をつかまえて文句を言う者はなかろう。スピノザ派ほど自分の体系に神の名をしょっちゅう登場させる哲学者はいないほどだ」（OD III p. 214a〔野沢協訳、『ピエール・ベール著作集』第六巻所収、法政大学出版局、1989年、81頁〕）を参照のこと。ベールはスピノザ派を無神論者とみなしているのである。それとは別の文脈（「物体的な神」を支持する唯物論と理神論を比較する文脈）においてベールは、あらゆる議論は問題となっている言葉にどのような意味を与えてやるかで互いの意見を一致させることがまずは問題になるために〔最終的には〕「言葉の争い」に帰結するのではないかという疑いを仄めかしている（『続・彗星雑考』第141章（OD III p. 392b））。ベールは『田舎の人の質問への答』第二部第109章（OD III p. 721b）において、多神教的な諸概念に関連する「統一性」の問題を議論し、これに続く幾つかの章のなかで、物体的・延長的・可分的な神は有神論に共通する包括的な分母に結び付けられる神格として受け入れられる概念なのかどうかを知るために、この神の問題に取り組んでいる。

<sup>13</sup> この点に関して『続・彗星雑考』第21章（OD III pp. 215b-217b）の以下の文章は重要である。この文章は第21章の冒頭に掲げられている。「神は存在する」という一般的な信仰定式書だけで満足すれば、万人の意見が統一される中心は難なくみつかりましょう。この命題は神々が複数いることを明確に排除するものではなく、また〔神の〕いかなる作用をも含意していませんから、異教徒にもユダヤ教徒にも受け入れられ、エピクロス派が気を悪くする必要もなかったでしょう。また、すべてのものを全体的に認識して自由に作用する存在を表していませんから、いかに札つきの無神論者でも受け入れるでしょう。こんな問題で言葉の争いをするほど狂った人間がどこにいらっしゃるか」（*ibid.*, p. 215b〔野沢協訳、同上書、86頁〕）。この概念は後の箇所（第28章）でもあらためて取り上げられている。そこでは広義論者が宗教上の経験のさまざまな形態を帰着させる「一致点」について議論されている。そしてベールは〔相手の論法をそのまま用いての〕反駁という手段、ないし限界値を想定するという手段に訴えかける。「抽象観念の内にある一致点で満足なさるなら、さらにもう一段上へお上がりください。そうすれば、無神論者も異教徒もユダヤ人と一致させられます。三者とも、万物の原因である永遠の存在を認めるでしょう。その上で（この点は捨象するでしょうから）、この存在が自由であるか、知性を持つか等々を検討すればいいのです」（*ibid.*, p. 230b〔野沢協訳、同上書、129頁〕）と述べられているとおりだ。一般的にいつてベールにとって問題であったのは、第一原因の存在ではなく、神の「本性」の規定に関することであった。そのことは著作集の欄外に掲げられた題目「問いは、神は存在するかということではなく、それはどのような本性をもっているかということにある」と同じく、本文でも「神という言葉で普遍的な第一原因だけを言うなら、神がいますのを認識するほどたやすことはあるまい」（*C.P.D.*, chap. XX, OD III p. 213b〔野沢協訳、同上書、81頁〕）と言われている。

要だったのである。そのことの帰結は私たちにとっては意表をつくものであり、そしてまた、バールと同時代の神学者の大半にとってもそうであった。しかしこの帰結は、バールにとっては首尾一貫している思考の導線に対応するものであることは認めなければならない。つまり、もっとも厳格なキリスト教〔の宗派〕、つまり、偶像崇拜からもっとも遠く、また、迷信盲信を受け容れることのもっとも少ないキリスト教〔の宗派〕（約言するならそれは非常に制限の多い信仰形態であり、カトリックはそこから排除されるのみならず、自然それ自体に或る種の作出性を認める哲学の支持者も排除される）を除けば、哲学的な立場の大半は、じっさいのところ無神論に多かれ少なかれ接近した領域のうちに包含されるということであり、多くの場合そうであるように、無神論を公言していようが（このことは非常に稀であるが）あるいは言外に含ませいようがそれはあまり問題にならないのである。

したがって、或る一つの第一原因の存在に関する命題の中身をはっきりさせる必要を感じるバールは、「神格一般の観念というのは偽である」<sup>14</sup>と主張することになる。この観念そのものに立脚したところで、有神論の根拠を同定するには不十分なのだ。このことが含意するのは他方で、無神論一般の観念もまた曖昧模糊としており、それは偽であるということである。この同じ理由から、ロッテルダムのこの哲学者は〔『続・彗星雑考』と〕併走関係にある『田舎の人の質問への答』の一連の章のなかで、無神論の分類という主題、ならびに思弁的無神論の問題に立ち返ることになる。その箇所ではバールは、有神論と無神論のあいだで一般的に交わされる通常の争いを説明するために「dispute de mots〔言葉の争い〕」ないし「logomachie〔枝葉末節に関する議論〕」という表現をあらためて取り上げている。バールにとって、この争いの全重量はどこにかかっているかといえば、ひととはどの有神論について、あるいはどの無神論について論じているのかという問いをめぐるものである。バールは『続・彗星雑考』と同様に『田舎の人の質問への答』のなかでも、有神論と無神論の正真正銘の区別は、神格に「人格的な」次元を（認めるか否かに）あると主張している。あらためてここでも両者の相違をなしているのは、第一原因の存在を肯定するか否か、ではない。第一原因の「本質」ないし「観念」をどう規定するかが問題なのである。「世界になんらかの原因があるのを否定もせず知らないわけでもないのに、無神論者が神の存在を否定したり知らなかったりするのはその意味です」<sup>15</sup>と述べられているとおりである。

「広義論的な」（ガラス神父風の）護教論者に対しても、またそれよりは「厳格な」（ヴォエティウス風の）神学者に対しても正反対の立場をとる「懷疑主義的無神論者」という人

<sup>14</sup> 『続・彗星雑考』第24章（OD III p. 221b）。バールのこの見解がヒュームに及ぼした影響については、拙論「Hume, Bayle et les *Dialogues Concerning Natural Religion*», dans A. McKenna et G. Paganini (éds.), *Pierre Bayle dans la République des Lettres*, Paris, Champion, 2004, pp. 527-567 を参照のこと。

<sup>15</sup> 『田舎の人の質問への答』第三部第15章（OD III p. 938a〔野沢協訳、『ピエール・バール著作集』第八巻所収、法政大学出版局、1997年、69頁〕）。同様に、神の認識は容易であるか否かに関する問いを扱う第13章から第15章（OD III pp. 931-43）も参照しなければならない。この問いについてバールは、「神の存在については論争などない、あるのは神の本質についてだけだ、と一部の人が言う」（第15章（OD III p. 937b〔野沢訳、同上書、68頁〕））と述べ、この二つの問いが切り離されえないことを見てとっている。

物像は、前述してきた複雑な図式のなかでどのような位置を占めるのだろうか<sup>16</sup>。ペールは一方で「思弁的な」無神論の「自由」をヴォエティウスよりも——ヴォエティウスにとってそれは受け容れられなかったはず——強く肯定している。しかし他方で、神格に関する厳密な概念を評価しようともしている。そしてそれはガラス神父のような護教論者たちからは、あまりに厳密にすぎるとおそらくは判断されるだろう。

まず以下のことを指摘しよう。ペールは、「独断論的」ないし「肯定的」無神論のあらゆる形態から「懷疑主義的」無神論を区別する差異を十分に認識していた。ここでの参照軸はあらためて「思弁的無神論に関するヒスベルト・ヴォエティウスの所説」であり、ペールはその「枝葉末節に関する議論」<sup>17</sup>を分析しているが、それは「思弁」する無神論者がじつさいに存在するのだということをはっきりと肯定するためである。まずペールは、単なる無知から、あるいは野蛮さから神を知らなかった民族（西インド諸島の住民やカナダ人）にとっての「消極的」無神論と〔神の存在に関する〕問題を深く考察した人々の「積極的」無神論——そのような人々は「有神論と無神論を相互に比較検討した」<sup>18</sup>者である——とを区別する。この後者のうちに含まれるのは、おそらく古代と近代の哲学者集団（古代であればストラトン、ディアゴラス、〔キュレネの〕テオドロスであり、近代であればヴァニーン、スピノザ、その他の少数の哲学者）であろう。彼らは『歴史批評辞典』でも『著作集〔*Œuvres diverses*〕』においても〔自らの立場を〕公言する無神論者として描き出されている<sup>19</sup>。そして今度はこの「積極的無神論」が二つの「部類」に分けられる。そしてそれぞれは互いに分離しながら「積極的無神論」を包含する。ペールは述べる、「何も決定を下さない人もいれば、無神論にはっきり軍配を上げる人もいます。前者は否定の側にも肯定の側にも種々の困難をみつけて、どちらにするかきめかねています。これは懷疑論者か理解不能論者です。」そして「なんらかの確実性が最後にみつかりと期待して検討を続ける」なら〔懷疑論者であるし〕（探求は決して終わることがないということ容認する「真理探求的な〔*zététique*〕」立場）、否定的な回答をもって探求をやめるなら〔理解不能論者なのである〕（「問題は不可知で自分の精神をはるかに超えると確信し、探求を打ち切って懷疑の内に固定します」）。その反対に、「無神論にはっきり軍配を上げる人も、その方が有神論より蓋然性が高いと思うからそうする場合もあれば、論証できると思うからそうする場合もあります」<sup>20</sup>。そしてそのような者としては、スピノザがもっとも明らかな事例をなす。

ここで重要なこととして指摘しておくべきは、最初の人びと、つまり懷疑論者もまたペールによって「積極的」無神論者ないし「思弁をする無神論者」としてみなされている

<sup>16</sup> 前掲したシュレーダー論文はペールの立場を考慮していないということは指摘しておこう。

<sup>17</sup> 『田舎の人の質問への答』第三部第13章（OD III p. 930b 以下〔野沢協訳、『ピエール・ペール著作集』第八巻所収、法政大学出版局、1997年、49頁（訳文一部改変）〕）。

<sup>18</sup> ペールは、「神の存在への信仰を一般的に意味する」ために「イギリス人のまねをして」（*ibid.*, p. 932n.〔野沢協訳、同上書、57頁〕）「有神論」という術語を用いていると明確に述べている。

<sup>19</sup> 『彗星雑考』第174章（OD III p. 110 et sv.）における「無神論者」のレビューも参照のこと。

<sup>20</sup> 『田舎の人の質問への答』第三部第13章（OD III p. 932a〔野沢協訳、『ピエール・ペール著作集』第八巻所収、法政大学出版局、1997年、52頁〕）。

ことだ。というのも「非有神論者または無神論者たる」には、「有神論は虚偽だと断定する」必要はなく、「それを問題視するだけで十分」だから。このことは、有神論の場合とおなじく「無神論にもさまざまな度合いがある」<sup>21</sup>というベールその人の確信に完全に合致する。

或る人びとはもっと遠くまで進んでいき、ついにはその「向こう側」（つまり神を否定する立場）を「賛同しても軽率にならないだけの蓋然性をそなえたもの」とみなすようになってしまう。別の人びとは「神の本性をめぐるキリスト教徒の説はありえない」と断定することで「不敬の極み」にまで行ってしまう。しかしベールは相変わらず強調するのだが、「それより低い段階でも無神論にはちがひありません」<sup>22</sup>。こうして『田舎の人の質問への答』の著者はその議論のうちに新たな人物像つまり懐疑主義的無神論者を招き入れることになる。このような人物像は、多くの神学者が見逃してきたものである（その例外はデイヴィッド・ドゥロドン〔David Derodon〕だが、じっさいのところこの議論に関していえば、ベールよりはるかに大雑把である）<sup>23</sup>。ベールはこのような懐疑主義的無神論者を「この大問題（神の存在）について肯定からも否定からも等しく距離を置く」人びととして描き出している<sup>24</sup>。

つまり、ここでベールにとって問題となっていたのは、すぐれて近代的な現象なのである。なるほどこの現象は古代に淵源するもの、つまり「神々の問題だが、それがいるかもしないかも、どんなものかも私にはわからない」<sup>25</sup>という、プロタゴラスに帰せられる文言に起因するものであるとしても、それは近代的な現象であると言える。[いずれにせよ]この文言は、端的にいった懐疑主義的な定式と結び付けられうる。またそれはベールによれば、キリスト教のもとで育てられるが信仰を持たない人びとのあいだでは比較的主流の現象でもある。なぜなら「その連中の大多数は単に疑っているだけで、神などいないという真の断定にまで達していない」からである。ただしベールは、彼らはいずれも「積極的・

<sup>21</sup> 『田舎の人の質問への答』第三部第13章（OD III p. 932b〔野沢協訳、同上書、53頁（なお、最後の文章は原典の欄外に書き込まれたものであり、日本語訳には収録されていない）〕）。

<sup>22</sup> 『田舎の人の質問への答』第三部第13章（OD III p. 932b〔野沢協訳、同上書、53頁〕）。

<sup>23</sup> ダブリンで開催された学会「Congrès des Lumières de Dublin」(1999年)で発表された拙論を参照のこと。Cf. G. Paganini, « Avant *La promenade du sceptique* : pyrrhonisme et clandestinité de Bayle à Diderot », dans G. Paganini, M. Benitez, J. Dybikowski (éds), *Scepticisme, Clandestinité et Libre Pensée / Scepticism, Clandestinity and Free-Thinking*, Paris, Champion, 2002, pp. 17-46（とりわけ、§1 « Pierre Bayle et l'invention de l'athéisme sceptique », pp. 17-23）。

<sup>24</sup> E・ラブルースは、ここに引用した文章に続けてベールが以下のように直ぐ付け加えているのは、自分自身の事例について（暗黙裡に）話すためであったと非常に丁寧しかたで主張している。Cf. 「いろんな異議に答える力はないと自覚するため、頭脳が示唆するところに一定の道を通ってついでにゆきただけだと無信仰へ陥りそうなのに、良心や感じという証拠、直接的な証し、神を傷つける危険、救いという多大な利害などから、どんなこみいった反論をされてもしっかりと身を支え、時々首をもたげかねない疑念があっても肯定の立場を堅持する人もいますが、そういう人のことを言うつもりはないのです」（『田舎の人の質問への答』第三部第13章（OD III pp. 932b-933a〔野沢協訳、『ピエール・ベール著作集』第八巻所収、法政大学出版局、1997年、53頁〕））。

<sup>25</sup> 『田舎の人の質問への答』第三部第13章（OD III p. 933a〔野沢協訳、同上書、54頁〕）。



思弁的無神論の罪を犯した者」<sup>26</sup>のうちに含められるべきであると考え続けているのだが。

しかし問題はまさしく、古代人の懷疑主義的不可知論、とりわけピュロン主義を、ペールが「懷疑主義的」無神論とみなし、そして近代人<sup>27</sup>に帰しているところのものと混同しないことである。ペールはよく分かっていたが、「懷疑主義的」無神論という概念は、単に形容矛盾〔*contradictio in adjecto*〕と映る——なぜなら消極的な種類のものであれ、それは独断的な立場を含意しているから——だけでなく、それはとりわけピュロン主義の伝統とは異質のものである。ピュロン主義は、共同体の宗教上の信条については、なるほど少なくとも表面的だが或る種の配慮をつねに払っていたからである。宗教上の信条は、「日常の実生活」を構成する四つの領域に関わる非独断的な傾向性の総体のうちに含まれる。そしてこの四つの領域としては、「自然が与える導き」、「諸情態から受ける強制」、そして「諸技術が与える教示」のほかに「諸々の法と習慣の伝承」があるわけだが、この「諸々の法と習慣の伝承」というのが宗教的な信条と慣習の総体のことなのである<sup>28</sup>。懷疑論者たちの論争は民間に広く普及している宗教を標的にはしない。むしろ、宗教を哲学的神学の一種に、つまり、純粹な「神話」であればそのようなあり方を拒否するはずの「独断」の総体に組み替えようとする幾人かの思想家たち、とりわけストア主義者たちの試みを標的にしていたのである。この点で「懷疑論者」は、あらゆる形態の「独断論者」、したがってまた「無神論者」とは非常に異なった存在であり、セクストスが書いているように「対立〔矛盾〕する諸言論の力の拮抗ゆえに、神々は、存在しないより、よりいっそう多く〔*ou mallon*〕存在することはないと語った」<sup>29</sup>。〔ペールは〕『歴史批評辞典』の項目「ピュロン」のなかで古代懷疑論のこの特徴的な側面を強調しており、近代の懷疑論と対立させている。ペールは、アンティゴノス・カリュステイオス〔前三世紀後半のギリシアの彫刻家にして作家。哲学者の列伝を執筆し、ディオゲネス・ラエルティオスの情報源の一つとなった〕の「悪ふざけ」ないしむしろ「いかさま」の向こうを張って、ピュロンは日常の実生活の見せかけを拒否するほどまでに「狂っていた」わけではないことを示しながらも、この古代の思想家の立場を擁護することだけに満足しない<sup>30</sup>。それ以上に『歴史批評辞典』のこの項目は、宗教面でのそれも含めてピュロンが示す配慮を強調している。ペールは基本的にはラ・モット・ル・ヴァイエの『異教徒の美德について (*La vertu des payens*)』に依拠しながら、「この人は或る大きな集まりの開祖で」、したがって「多くの点で推奨に値したに相違ない人物とみなさねばならない」と主張している。その出身地

<sup>26</sup> 『田舎の人の質問への答』第三部第13章 (OD III p. 933a [野沢協訳、同上書、54頁])。

<sup>27</sup> 近代人とは、たとえ「神はいますと〔いうのを〕心の中で否定するのは差し控える」にせよ、「神はいますと心の中で断定しなくなっ」た者である。それは「無神論への反論も解消しがたく思われた」(*ibid.*, p. 933a [野沢協訳、同上書、54頁]) から。

<sup>28</sup> セクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』第一巻 237 [金山弥平・金山万里子訳、京都大学学術出版会、1998年、121頁]。『自然学者たちへの論駁 (*Adversus Physicos*)』第一巻 49 も参照のこと。

<sup>29</sup> 『自然学者たちへの論駁』第一巻 59 [金山弥平・金山万里子訳、京都大学学術出版会、2010年、29頁] も参照のこと。

<sup>30</sup> ピエール・ペール『歴史批評辞典』第五版、ロッテルダム・アムステルダム、1740年、項目「ピュロン」本文ならびに脚注Dを参照のこと。

の人びとからは「最高祭司」という敬称を付与され、アテナイ人からは市民権を与えられたということが、それをはっきりと証しているというのである<sup>31</sup>。

懐疑論が宗教的な信条と結び関係をめぐつては、宗教が古代においてそうであったように単に道徳的な主張や市民生活にかかわる主張のみならず独断〔教義〕的な主張をするようになると、問題は非常に異なった観点から生ずるようになる。つまり、そのような主張がなされるようになると、懐疑と信仰の並立は困難だということが理解されるのである。『歴史批評辞典』の項目「ピュロン」が率直に認めているように懐疑と信仰を並立させることは矛盾した帰結を引き起こすかもしれないのに〔、じっさいそうしてみるとやはりその並立が困難だと分かるのである〕。そしてじっさいにベールは当該箇所以下二つの対立するテーゼを提示している。一方でベールは、「あらゆることについて議論」する「方法」としてのピュロン主義は「神学の学校で〔……〕忌み嫌われるのはもっとも」であり、「その学校から新たな力を汲みだそうとする」ものだとも認めている。それはまさしく脚注Bで二人の哲学者でもある神父たちが行なう有名な対話にみられるとおりである。他方で、あまり人口に膾炙していない「キリスト教的ピュロン主義」の主張によれば懐疑論は「人間におのれの闇を自覚させ、それで天の助けを乞い求め、信仰の権威に従うよう余儀なくさせる上で〔……〕役に立ちうる」<sup>32</sup>と認めている。

懐疑論における宗教的な側面ないしそうでない側面に関する問題についてベールはここで、ピュロン主義的かつ現象主義的な方法論をとっている。つまり、現象と現象を、意見と意見を対立させる方法論である。一方でベールは、ラ・モットの『異教徒の美德について』にみられるようなこの著者の〈公式〉の立場を典型例として紹介している。つまりこの著作において「ピュロン主義」は「キリスト教にもっとも反しない立場」として記述されているのだ。しかもベールは、アレオパゴスのディオニシオの命題学〔真偽の判断がくだせる命題についての理論〕的神学から、「人間的な」智慧についてパウロが展開した批判から、そして、カルヴァンならびにパスカルから、〔この立場を〕強く補強するような参照を縦横無尽に引くということをする。しかし他方で、かつ同じ脚注〔C〕のなかでベールは、それ以外の「有能な人士」（ラ・ブラセット、ならびにローマのクレメンスを引用するゲラルト・ヴォシウス）によれば「ピュロン主義ほど宗教と対立するものはない」と述べている。なぜならピュロン主義は「信仰のみならず理性の全面的な消滅」だから。そうなるならラ・モット・ル・ヴァイエの立場は傑出したものとなる。というのもこの脚注のなかで引用された文章から判断するに、この自由思想家は論争における二つの役割を同時に演じているからだ。じっさいにラ・モット・ル・ヴァイエは「人間の無知を素直に認めることを土台とする懐疑論の体系を、あらゆる体系の中でわれわれの信条にもっとも反しないもの」と認めている。しかし別のところでは「ピュロンも、神について彼と意見を同じうした弟子たち全部も救いは絶望的だ」と判断することで、「多くの古代哲学者に垂れた恩恵からピュロン派を除外」する<sup>33</sup>。そしてこのことは、「盲従的信仰」という概念に依拠して、ジャンセニストによって糾弾された古代の哲学者たちの大半をその糾弾から

<sup>31</sup> 項目「ピュロン」脚注D (t. III, p. 734b) [野沢協訳、『ピエール・ベール著作集』第五巻、法政大学出版局、1987年、224頁]。

<sup>32</sup> 項目「ピュロン」本文 (t. III, pp. 732-33) [野沢協訳、同上書、224頁]。

〈救う〉ことを明確な目的として書かれた『異教徒の美德について』〔ジャンセニズムの拡大を防ぐために、リシュリユーの依頼によって執筆され、1641年にパリで出版された〕といった著作においても同様なのである。懐疑論によって醸成された精神状態との関係でそれ自身みられた宗教的挙措に関するペールの結論は、ラ・モットという個別の事例を超えて一般的な射程をもったものとなる。じっさいにここでの問題を構成している要素は、『歴史批評辞典』のうちこの脚注に少し先立つ箇所而言及されていたように、また、この脚注の前の脚注Bのなかでペールがすでに述べていたように、「宗教」と端的な「ピュロン主義」の「対立」に関するものである。「懐疑」と併存することができ、また、絶対的な確実性を要請することなく「蓋然性」の一つの度合いで満足する「自然学」や「政治学」とは異なり、神学は当然のことながらピュロン主義に警戒する。「ピュロン主義が危険なのはこの神的な学問にとってだ」。というのも、とりわけキリスト教のような宗教は「確実性にもとづかねばならない。その真理に対する強い確信が心から消え去ったら、宗教の目的・効果・効用はたちまち崩れ去ってしまう」<sup>34</sup>からである。

ラ・モットという人物についてペールが『歴史批評辞典』のなかでくだしている判断

<sup>33</sup> ラ・モット・ル・ヴァイエのこの文章は、ペールの『歴史批評辞典』(p. 734a-b〔野沢協訳、同上書、221-223頁〕)に掲載されている。ラ・モット・ル・ヴァイエによれば懐疑論者の救いが「絶望的」とされることについては、以前に拙論「*Avant La promenade du sceptique ...*」(注23に前掲)の23頁から31頁において考察した。J.-M. Grosは、論文「*Le masque du "scepticisme chrétien" chez La Mothe Le Vayer*», *Libertinage et philosophie au XVII<sup>e</sup> siècle*, 5, 2001, pp. 83-98において、同じテキスト(『異教徒の美德について』とペールのテキスト)を題材にしながら〔私たち〕ほぼ同様の考察を行なっている。しかしながら私たちは、J.-M. Grosの結論には与しない。というのも彼は、「判断停止は既存の諸価値を表面的には受け入れることに帰着するのだから」、懐疑論は「彼にとってもまた」「仮面」や「避難所、潜伏場所」ではないにしても「少なくとも部分的には覆いのようなもの」ではなかったかと述べることで、懐疑論の重要性を相対化してしまっているからだ(« *La place du cynisme dans la philosophie libertine* », *Libertinage et philosophie au XVII<sup>e</sup> siècle*, 7, 2003, pp. 121-139, spéc. pp. 138-139)。私たちの解釈により近いのは、Isabelle Moreauの論文「*La Mothe Le Vayer, ou comment transformer un ouvrage de commande sur la grâce en défense et illustration des philosophes de l'Antiquité réputés athées* », dans Isabelle Moreau et Grégoire Holtz (éds.), *Parler librement. La liberté de parole au tournant du XVI<sup>e</sup> et du XVII<sup>e</sup> siècle*, Lyon, ENS Éditions, 2005, pp. 159-170における結論である。ピエール・ペールと自由思想の文化とりわけラ・モットの哲学との関係については、拙著 *Analisi della fede e critica della ragione nella filosofia di Pierre Bayle*, cit., pp. 40-46, 85-89, 160-164, 257-260のほか、S. Giocantiの論文「*Bayle et La Mothe Le Vayer* », dans Antony McKenna et Gianni Paganini (éds.), *Pierre Bayle dans la République des Lettres*, cit., pp. 243-263を参照のこと。また以下の研究も参照のこと。Cf. Lorenzo Bianchi (« *Pierre Bayle et le libertinage érudit* », dans Hans Bots (éd.), *Critique, savoir et érudition à la veille des Lumières. Le Dictionnaire de Pierre Bayle*, Amsterdam-Maarssen, APA, 1998, pp. 251-267) ; Didier Foucault (« *Pierre Bayle et Vanini* », dans Hubert Bost et Philippe de Robert (éd.), *Pierre Bayle, citoyen du monde. De l'enfant de Carla à l'auteur du Dictionnaire*, Paris, Champion, 1999, pp. 227-242) ; Sophie Gouverneur (« *Bayle et l'écriture de Naudé* », dans *Pierre Bayle dans la République des Lettres*, cit., pp. 265-286)。

<sup>34</sup> 項目「ピュロン」脚注B (p. 732a)〔野沢協訳、同上書、215-216頁〕。この項目に関する「避難所」から寄せられた評定については、現在のところ、Hubert Bost, *Pierre Bayle*, Paris, Fayard, 2006, p. 431, 435を参照のこと。

は、非常にバランスのとれたものであり、ベールにはお馴染みのことながら、個人の良心〔意識〕に属することについては詮索しないという配慮を示したものとなっている。こうしてベールは、不信心とか「無信仰」とかいう糾弾からラ・モットを擁護する。つまり、そのような糾弾は「無謀な判断」である。なぜなら——ベールは繰り返し述べているが——「信仰に反対して言うことを自由に書くのと、そのことを全く真実と思うのは大違い」だから。また他方で、ラ・モットの若い時に書かれ、もっとも危険視された著作（つまりの『オラシウス・トゥベロ〔による古代人を模した〕対話』のこと）を参照するとき、ベールにはもはや迷いはない。ラ・モットの個人的な振る舞いが古代人を真似た本当の意味での「賢者」として映り、「几帳面で謹厳で賢明だったのに、それでも全然無信仰だと疑われた」という判断がくだされているから。このことはとりわけこの著作について言われる。なぜなら、ラ・モットはこの著作において「懷疑論ないしピュロン派の原理に偏愛」を示しすぎたから、つまり言葉の〔侮蔑ではなく〕知性的な意味において「自由思想をふんだんにもっている」から。しかし私たちはここで、この項目における見せかけの擁護にもかかわらず、ベールがラ・モットを読んだ時の第一印象を臆せず述べている書簡（1674年から1675年まで）を念頭におきながら、ベールによるラ・モット擁護という挙措の背後にまわってその真意を読み取らなければならない。というのもこの書簡のなかでベールは、ラ・モットの『オラシウス・トゥベロ〔による古代人を模した〕対話』には「大変な博識がつまっているが、しかしそれ以上に不信心に満ちみちている」と述べているからである<sup>35</sup>。

厳密にいうなら、項目「ピュロン」の脚注Cで提示される、宗教上あるいは反宗教上の「利点」に関して〔それを支持する〕命題とそれに反対する命題を組み合わせることから導かれる帰結は、懷疑論者にとっては、非決定という態度をとることである。これはまさしくピュロン主義的な「イソステネイア〔同等の力をもつ議論〕」の精神のうちに見出されるものだ。さて、まさしく判断停止（エポケー）という懷疑主義的概念こそベールにとって懷疑論と信仰の関係という複雑な問題を解決するための鍵となる。それは、ピュロン主義的な天秤を一方に、つまり懷疑主義的無宗教〔*irréligion sceptique*〕の側に傾けることでなされる。このような〔懷疑主義的無宗教という〕結論を得るために『歴史批評辞典』の著者は、ラ・モットの『異教徒の美德について』から別の文言を想起するにとどめている。ラ・モットはそのなかで、「独断的な」種類の無神論とピュロン主義者に固有な懷疑のうちに含意されている無神論とははっきり区別している。ラ・モットによればピュロン主義者は「一部の人が思ったように無神論を公然と唱え〔てはいない〕。彼らがほかの哲学者と同様に神々の存在を認め、それに通常の崇拝を捧げ、その摂理を否定しなかったことはセクストゥス〔ママ〕・エンピリクス（『ピュロン主義概説』、第三巻、第一章）にものっている」。このことはいずれも——すでに見たように——端的にいて、ピュロン主義者が「日常の実生活」を規制する四つのものとして示していた表面的な順応主義に含まれる。しかし、ラ・モットのここでの判断は——ベールが持ち出した限りでということだが——、もっと遠くまで行き、懷疑主義的立場の外皮を貫いてその深部にあるその動機にまで届くものとなっている。「しかし〔ピュロン主義者が〕、第一原因を認めたら当時の偶像崇拝を馬鹿にしたはずなのに、それを認める決心が遂につかなくなったことは別としても、彼らが判断を停止してしか神性について何も信じなかったこと、前記のものも



何ひとつ疑いながらでしか、自分が暮らす時代と国の法律・慣習に合わせるためにしか告白しなかったことは間違いない」。結論としてラ・モット・ル・ヴァイエの裁決は非常に冷徹なものである。『異教徒の美德について』のなかで述べられているように、〔異教徒である〕古代の哲学者たちを「救う」という企図が全面的に立脚する「あの暗黙の信仰の光にいささかも」浴さなかったために、「そういうたぐいの懐疑論者もピュロン派も地獄への道を避けられたとはとても思えない」<sup>35</sup>。これは、ピュロン主義の「救済」をめぐる問題についてラ・モット・ル・ヴァイエが放つことのできた最後の言葉〔ぎりぎりの線〕である。しかしそれはまた、ベールにとっての結論でもある。というのもこの裁決についてベールが注解をしていないことははっきりしているし、また、別の箇所ではこれほどまでに微妙な問題があらためて取り上げられることもないからである。それは見てのとおりだと思うが、ここでの核心的な問題は、「精神を宙吊り状態におくこと」（したがってエポケー）と、宗教ならびに神学が要求する「確実性」ないし堅固さ（「強い確信〔*ferme persuasion*〕」）とのあいだにある両立不可能性にかかわる。「キリスト教的ピュロン主義」

<sup>35</sup> 項目「ヴァイエ」本文 (t. IV, p. 408) : 「古代の賢者を髣髴とさせるきちんとした人で、品行の面では文字どおり哲人と言うべく、許されている快樂すら軽んじ、書斎暮らしと本を読んだり書いたりすることが三度の飯よりも好きだった。そんなに几帳面で謹厳で賢明だったのに、それでも全然無信仰だと疑われた。その根拠はどうやら、この人がものしてオラシウス・トゥベロという名で発表したいいくつかの対話と、また一般に、自作で懐疑論ないしピュロン派の原理に偏愛を示しすぎたことにあったらしい。オラシウス・トゥベロの対話に自由思想がふんだんにあるのは確かだが、著者は無信仰だとそこから結論しようとする人は無謀な判断という罪を犯すことになる。信仰に反対して言うことを自由に書くのと、そのことを全く真実と思うのは大違いだからである」〔野沢協訳、同上書、800頁〕。脚注においてベールは、ギ・パタンの書簡（1649年7月13日付）を引用している。この書簡のなかでヴァイエは「並はずれてストイックで、ほめられたがるくせに絶対誰もほめず、変人で、気まぐれで、ディアゴラスやプロタゴラスが陥った精神的悪徳の持ち主ではないかと疑われている」〔野沢協訳、同上書、801頁〕人として描かれている。いうまでもなく、ヴァイエを無神論のかどで告発しているわけだ。ベールは〔ヴァイエの〕『対話』を若い時から知っていた。Vincent Minutoli に宛てられた 1674 年 7 月 12 日付けの書簡を参照せよ。Cf. *Correspondance de Pierre Bayle*, publiée et annotée par Elisabeth Labrousse, Antony McKenna et al., vol. I, Oxford, Voltaire Foundation, 1999, lettre 61, p. 290 : « J'ai lu quelques dialogues de Mr [de] La Mot[he Le Vayer], que l'on m'a assuré n'avoir pas été imprimez avec ses œuvres. Ils sont imprimez sous le nom d'Orasius Tubero, et ils contiennent des choses extrêmement hardies sur le fait de la religion et de l'existence de Dieu ». また、兄ヤコブに宛てられた 1675 年 7 月 21 日付けの書簡も参照せよ。Cf. *Correspondance*, vol. II, Oxford, Voltaire Foundation, 2001, lettre 105, pp. 250-251 : « Je leus à Rouen les *Dialogues d'Orasius Tubero* imprimés. Il y a bien de l'érudition, mais il y a encore plus d'impiété. Ce sont des coups de jeunesse, je l'avoue, je ne sais pourtant pas si l'auteur s'en est repenti, car toute sa vie il a écrit à la defense du pirrhonisme d'une maniere qui ne sentoit pas son ame fort devote. Je tiens Mr de La Mothe Le Vayer et Mr Naudé pour les 2 savans de ce siecle qui avoient le plus de lecture et l'esprit le plus epuré des sentimens populaires, mais parce qu'ils font trop les esprits forts, ils nous debitent bien souvent des doctrines qui ont de perilleuses consequences ». さらに Des Maizeaux 宛ての 1705 年 4 月 3 日付けの書簡のなかでベールは、ベーコンが（『随想集〔*Essays*〕』において）「偶像崇拜は無神論よりも質が悪い」ことを示している有名な箇所に遡るために『オラシウス・トゥベロ〔による古代人を模した〕対話』を使用したと書いている（「私はかつてこれを最初から最後まで読んだ」(OD IV, p. 852)）。

<sup>36</sup> 項目「ピュロン」脚注 C (p. 734a-b) 〔野沢協訳、同上書、223頁〕。

という概念の不安定さは、これら二つのたがいに通約不可な関係にある権勢のあいだの緊張として評価されるのである<sup>37</sup>。

しかしここで検討をやめるわけにはいかない。というのも、ピュロン主義的な判断停止はじっさいには有神論と無神論のあいだを進む第三の途ではなく、むしろ「積極的」無神論の一つの形態ではないか——『田舎の人の質問への答』がそう提示しているように——と自問することで、問題をいっそう丁寧に解きほぐすことができるだろうから。不可知論とは、神の存在を肯定するのとも否定するのとも異なる別の選択肢であるとする十九世紀的かつ二十世紀的な見方によれば、エポケーのうちにこの第三の立場を見出したくなる。このような可能性を退けるためには『田舎の人の質問への答』に立ち返れば十分である。ペールはそこで、キリスト教のもとで養育されるも後に懐疑論者になった人びとと、例えば中国の文人のように、「純粹に無神論そのものであるような哲学の体系を幼少のころから」学んできた人びととを注意深く区別している。前者は「神の存在について」「検討したために」「説得される」ことをやめたとき、ストラトン主義者、中国人あるいはスピノザ主義者の独断的な無神論よりも、むしろプロタゴラスという事例をその懐疑主義的な非決定も含めて<sup>38</sup> 真似ることになる。しかし彼らはそれでも「思弁をする無神論者」であることには変わらない。なぜなら、彼らが所属するクラスを「思弁的な有神論者」との対比において「特徴づける」「それ固有の差異」とは、「神の存在にまったく説得されない」ということにあるだろうから。究極的にいえば、ペールはここで、自分自身が生きてきた或る経験ないしは少なくとも或る誘惑を記述していると推測することもできるだろう。彼は次のように指摘している。非常に多くの場合、少なくともキリスト教徒のなかには「神はいますと心の中で断定しなくなっ」た者がいて、〔しかし〕この者は「それを心の中で否定するのは差し控え」ている。「無神論への反論も解消しがたく思われたに相違ないから」。そしてペールがここで取り上げるのは、天秤というメタファー、ないしピュロン主義的な「イソステネイア」というメタファーほどのものではなく、別のメタファーである。つまり近代の懐疑論は「同じ強さを持つ二つの磁石にはさまれた鉄片のようにちがいません」<sup>39</sup> というのである。ここでは次のことを指摘しておこう。つまり、このような最終見解は、精神を宙吊り状態におくというセクストスの規則を打ち破るものではまったくなく、精神をして一方の方向ないし別の方向に赴かせるように強制するために外部から何かを持ち込むものでもない、ということだ。それでは結論はどこに存するかといえば、それはむしろ、判断停止を維持すること、そして、この規則が宗教的な次元における良心にとって意味するところ——この良心はこの規則の影響をこうむる——を深めること

<sup>37</sup> これとは別の評価については以下の研究書を参照のこと。Cf. José R. Maia Neto, *The Christianization of Pyrrhonism. Scepticism and Faith in Pascal, Kierkegaard, and Shestov*, Dordrecht, Kluwer, 1995. ラ・モットとのかかわりでみられた十七世紀における懐疑主義的無神論、また、デカルトとブルダンのあいだで議論されたこの無神論に関する資料については、拙論「The Quarrel Over Ancient and Modern Scepticism: Some Reflections on Descartes and His Context」, dans les Actes du Colloque de Los Angeles, *The Legacies of Richard H. Popkin*, ed. by Jeremy Popkin, Dordrecht, Springer, 2008, pp. 173-194 を参照。この拙論は、*Skepsis. Le débat des modernes sur le scepticisme*, Paris, Vrin, 2008 (coll. « De Pétrarque à Descartes »), pp. 241-262 に再録した。

<sup>38</sup> R.Q.P., loc. cit., p. 933a (cité *supra*, note 25).

のほうにある。ここでは、キリスト教的神学という事例においてベールの目に映った、それ自体は受け容れることのできるアプリアリな概念とこれとは相容れないアポステリアリな概念との対立が織りなす、しかも『歴史批評辞典』から最後の著作である『マクシムとテミストの対談』にいたるまでベールの著作において何度も打ち出される対立が織りなす複雑な弁証法を想起する必要はまったくない。懷疑主義的な疑念に襲われたキリスト教徒の精神状態を正確に記述するこのような事態は、懷疑主義的な〔判断の〕停止という〔維持するのが〕困難な平衡状態に上手く対応するものであるが、しかし「エポケー」と「説得」ないし宗教的「確実性」の対立についてベールが私たちに説明するところを念頭におくなら、キリスト教的な信仰の要請にとってはやはり致命的なものであることには変わらないから。

しかしながら私たちの目的は、ベールという人間の「心の底を探る」こと（そのことでベールはヴォエティウスを諷めていた）<sup>40</sup>ではなく、知的な意味でどちらかといえば新しい人物像、つまり懷疑主義的無神論をとる人物像を当時の論争のうちにどのように招き入れたかを見ることであった。じっさいに私たちは『田舎の人の質問への答』において、新しい種類の「無神論者」、つまり「積極的」で「思弁的」な「無神論者」が登場する場面を目の当たりにした。このような無神論者は、独断的ではなく批判的な道具として懷疑論を用い、そして、別の諸体系を打ち立てるよりは〔これまで〕受け止められてきた確実性を弱体化させることを目指すような人物である。

また次のことも指摘しなければならない。ベールは懷疑論の抜け道を用意したのだ、ということである。それはラ・モット・ル・ヴァイエが用意したような出口ではない。ベールはむしろ、論争状態にある二つの立場（疑念と信仰）、ならびに両者が対峙するときの原理を外側から眺めることで、つまり本当の意味で「遠目から」眺めることで、袋小路から抜け出ようとするのだ。ベールはそれを、魂は「心配するにおよばない」、それというのも「懷疑論の理屈に欺かれるおそれなどある人は昔からごく少数だったし、それはいつの世でも同じだろう」から、と述べながら行なう。じっさいに「信徒においては神の恩寵」が、他の人間においては「教育の力」が、そしてまた「無知」あるいは「生まれつき断定したがる傾向」（これらを E・D・ジェームズは「挑発的な三つ組〔a provocative trio〕」<sup>41</sup>と呼んだ）が、結び目を解きほぐすことはできないにしても、それを断ち切ってくれる。それは、「ピュロン派の矢を通さぬ」——彼らは〔自分たちを〕「今では昔より恐るべき存在になったと思ひ込んでいるが」——「楯の役をしてくれる」<sup>42</sup> ことによってである。ベールは論争の争点を単なる理性的な弁証法の次元から切り離して人間学の次元——そこで

<sup>39</sup> 『田舎の人の質問への答』第三部第 13 章（OD III pp. 932b-933a〔野沢協訳、『ピエール・ベール著作集』第八巻所収、法政大学出版局、1997 年、54 頁〕）。無神論「史家」ベールについては、以下の研究における指摘を参照のこと。Cf. Alan Charles Kors, *Atheism in France, 1650-1729*, vol. I, Princeton University Press, 1990, pp. 246-262. それによれば、無神論を公言している哲学者の数を増やさない傾向がベールにはあるという（p. 251: « Bayle was always far more ready to exonerate than to convict individuals of atheism »）。しかし、この「事実上の〔de fait〕」無神論の傍らに「権利上の〔de droit〕」無神論のあることがベールにおいては認められるのだ。この点については拙著 *Analisi della fede e critica della ragione nella filosofia di Pierre Bayle*, cit., pp. 290-312 を参照のこと。

<sup>40</sup> 『田舎の人の質問への答』第三部第 13 章（OD III p. 932a〔野沢協訳、同上書、51 頁〕）。

は、超自然的な原動力と、それ以外のまったく自然的な、そしてあまりに人間的すぎる動力（教育、無知、本能的な傾動）とが、その帰結に関する相違までが解消されて収斂する——に移すことで、懐疑論は人間にとって支持しうる挙措なのか、それともむしろ「自然〔本性〕的」な衝動によってつねに乗り越えられるものではないのか、というヒュームのな問題を先取りしながら、論争において決定的な転換の痕跡を残したのである。

<sup>41</sup> この表現は以下の論考に借りた。Cf. E. D. James, « Scepticism and fideism in Bayle's *Dictionnaire* », *French Studies*, 16, 1962, pp. 307-323, p. 316 notamment. この論文は、改めて取り上げるに値する議論を引き起こした。以下の論考を参照のこと。Cf. Haydn T. Mason, « Pierre Bayle's religious views », *ibid.*, 17, 1963, pp. 205-217 ; Harry M. Bracken, « Bayle not a sceptic ? », *Journal of the History of Ideas*, 25, 1964, pp. 169-180.

<sup>42</sup> 項目「ピュロン」脚注B (p. 732a〔野沢協訳、『ピエール・ベール著作集』第五巻、法政大学出版局、1987年、216頁〕)。モンテーニュからベールへと続く長い流れにおいて人間的な信仰が「問題視」されてきたことについては、Antony McKenna, « "Ils croient, ou ils croient croire" : réflexions sur la foi chez Montaigne et chez Bayle », *Bulletin de l'Association des Amis de Montaigne*, janvier 1999 における説得的な指摘を参照のこと。



## 解題

津 崎 良 典

ここに掲載するのは、イタリアの東ピエモンテ大学のジャンニ・パガニーニ（Gianni Paganini）教授が2015年3月9日に、筑波大学大学院人文社会科学研究科哲学・思想専攻主催第一回フランス語によるフランス哲学セミナー「ピエール・ペールの思想」として、筑波大学東京キャンパスにおいてフランス語で行なった講演の邦訳である。パガニーニ教授は、筑波大学リサーチユニット「東西哲学における修行の系譜学」（代表：津崎良典）における研究活動に従事するために、平成26年度日本学術振興会外国人研究者招へい（短期）の助成を受け、初来日した。

パガニーニ教授の西洋近世哲学史研究は、1/ 近世哲学における古代懐疑論の復興、2/ トマス・ホッブズ、3/ ピエール・ペールの三点を主要な対象とする。それぞれについて概観するなら、1/ 当該分野に関する研究の第一人者リチャード・ポプキン（2005年没）に続く第二世代の筆頭として、モンテーニュ、サンチェス、ラ・モット・ル・ヴァイエ、ペールなどによる古代懐疑論の受容、ならびにカンパネッラ、メルセンヌ、ホッブズ、デカルトらによる懐疑論への応答について、ポプキンの研究成果を抜本的に修正し、かつ、大々的に展開する作業に従事すること、2/ ホッブズその人の思索、ならびにガッサンディといった同時代人との哲学（史）的連関を解明し、さらに、ホッブズの思索を哲学史に位置づけ評価すべく、ヴァッラ、エラスムス、リプシウス、そして『ヘルメス文書』といった人文主義的・ルネサンス哲学的淵源を分析すること、そして3/ ペールにおける信仰と理性をめぐる諸問題の分析から出発して、その思索に哲学史的解釈学を施すべく、十七世紀フランスにおける自由思想（libertinage）の系譜と地下文書出版の実態を解明し、かつ、ヒュームに代表される近世経験主義哲学との連関を考察すること、以上である。

著書は共著も含めると20冊、単著論文は130本、国際学会組織は20件、口頭発表は180本をいずれも超える。そのなかから代表的なものを以下に列記する。

### 【単著】

1. G. Paganini, *Analisi della fede e critica della ragione nella filosofia di Pierre Bayle*, Firenze : La Nuova Italia, 1980, pp. x-440.
2. G. Paganini, *Les philosophies clandestines à l'âge classique*, Paris : Presses Universitaires de France, 2005, pp. 154.
3. G. Paganini, *Introduzione alle filosofie clandestine*, Roma-Bari : Laterza, 2008, pp. 182.
4. G. Paganini, *Skepsis. Le débat des modernes sur le scepticisme*, Paris : J. Vrin, 2008, pp. 448.

【一次資料の校訂・解説】

5. *Theophrastus redivivus*, vols. I et II, edizione prima e critica a cura di G. Canziani e G. Paganini, Firenze : La Nuova Italia, 1981-1982, pp. CXXIV-998.
6. Thomas Hobbes, *Moto, luogo e tempo* [De motu, loco et tempore], a cura di G. Paganini, Torino : UTET, 2010, pp. 708.

【論文集編著】

7. *The Return of Scepticism. From Hobbes and Descartes to Bayle*, ed. by G. Paganini, "International Archives of the History of Ideas", 184, Dordrecht-Boston-London : Kluwer, 2003, pp. xix-486.
8. *Der Garten und die Moderne. Epikureische Moral und Politik vom Humanismus bis zur Aufklärung*, Arbeitsgespräch der Herzog August Bibliothek, Wolfenbüttel, 23. Und 24 November 2000, hrsg. von G. Paganini und E. Tortarolo, "Quaestiones", Stuttgart : Frommann-Holzboog, 2004, pp. 410.
9. *Pierre Bayle dans la République des Lettres. Philosophie, religion, critique*, eds. par A. McKenna et G. Paganini, Paris : Champion, 2004, pp. 589.
10. *Skepticism in the Modern Age. Building on the Work of Richard Popkin*, ed. by J. R. Maia Neto, G. Paganini and J. Ch. Laursen, Leiden-Boston : Brill, 2009, pp. viii-390.

以上の業績のなかでも *Skepsis. Le débat des modernes sur le scepticisme* は、出版国フランス内外で極めて高い評価を与えられ、2009年には Prix La Bruyère de l'Académie Française（アカデミー・フランセーズ・ラ・ブリュイエール賞）を、2011年には、哲学研究に顕著な功績をあげた研究者一名を十年に一回表彰するためにイタリアのアッカデミア・デイ・リンチェイが設立した学術賞 Premio del Ministro per i Beni e le Attività Culturali per le Scienze filosofiche dall'Accademia Nazionale dei Lincei をそれぞれ授けられた。この著作もそうであり、また、本講演もそうであると言えるが、パガニーニ教授をはじめとするイタリア人研究者による西洋近世哲学史研究は、ラテン語能力の強みを生かした一次資料の渉猟、人文主義的精神を受け継いだ汎ヨーロッパ的視点の特徴としている。徹底的に文献学を重視する影響作用史研究の手法とその成果は、世界最高峰と言っても決して大袈裟ではないだろう。パガニーニ教授の背後に聳え立つこうしたイタリア人文学の伝統の蓄積が今回の講演会により私たち日本の人文学徒に分け与えられたことは、その研究手法の多角化と重層化に多少なりとも寄与するものであったと、主催者なりに自負する所以である。

本講演は、パガニーニ教授が *Kriterion. Revista de Filosofia* 誌上に発表した論文 « Pierre Bayle et le statut de l'athéisme sceptique » (2009, pp. 391-406) に依拠したものであり、ベールにおける「懐疑主義的無神論」を主題とする。あくまでもベールによれば、という留保をつけた上でだが、有神論 (théisme) と対立する無神論 (athéisme) は、否定的なそれと積極的なそれに二分される。前者は、無知を原因とする無神論である。後者は、学識を根拠とした無神論である。また、ベールの仮想の対話者であったヴォエティウスも論ずる「思弁的な」無神論とも重なる。いずれにせよ、この積極的な無神論は、さらに「懐疑主

義的」なそれと独断論的なそれに二分にされる。前者は、神の存在について判断を停止するにとどめ、後者はこれを否定するか、あるいは人格、自由、摂理、慈善といった神格に備わるさまざまな性質を神から取り除くにとどめるかに二分される。この図式には収まらないタイプの無神論としては、講演で言及されているように、「本来はそれを狙っていないのに結果的に無神論になってしまうもの」が挙げられるだろう。いずれにせよ、独断論的な無神論者の代表格はスピノザだと言えるが、ベールは、それとは異なる無神論のタイプ、つまり懷疑主義的なそれについて、ヴォエティウスを引き合いに出しつつ論じており、そのことの哲学的な意義が本講演での検討課題であった。具体的には、ヒュームとの比較検討が示唆され、極めて興味深い。いまや古典となった Norman Kemp Smith のヒューム研究以来、ヒュームがその思索の多くをベールに負っていることは周知のとおりである。十八世紀の哲学者のなかでも最もベールのな哲学者と言われるヒューム、ベールの思索を活用するだけにとどまらず、それに忠実でさえあったとも言われるヒュームが、この懷疑論の問題をどのように展開していったかは、今後の西洋哲学史研究の一つの鉅脈をなすだろう。

なお、ベールと「懷疑主義的無神論」それ自体との関係は錯綜していることが講演後の議論において取り上げられた。ベールは、独断論的無神論よりも「懷疑主義的無神論」のほうに共感を感じていたと考えられるが、それでは自身が懷疑主義的無神論者であったかといえ、これはそう簡単には裁定できない問いであるように思われる。日本では、ベールを信仰主義者（fidéiste）とみなす見解が主流であると思われるが、パガニーニ教授は、むしろ懷疑論者（sceptique）とみなしており、この点において日伊双方の参加者のあいだで極めて充実した議論が繰り広げられた。しかもフランスを代表するベール研究者 Antony McKenna、またイタリアを代表するベール研究者 Gianluca Mori は、いずれもベールを信仰主義者でも懷疑論者でもなく合理主義者（rationaliste）とみなす傾向が強く、「……主義」、「……主義者」というレッテル付けのもつ限界を十分におさえた上で、その評価の未だ定まらぬベール哲学の驚くべき多様さが改めて浮かび上がった本講演会は、さらなる研究へと参加者たちを誘うものであった。本講演会の司会と通訳は、訳者が務めた。

筑波大学大学院 人文社会科学研究所 哲学・思想専攻 主催  
フランス語によるフランス哲学セミナー

## ピエール・ベールの思想

講師

ジャンニ・パガニーニ（イタリア・東ピエモンテ大学教授）

司会・通訳 津崎良典（筑波大学人文社会系助教）

日時 二〇一五年三月九日（月） 十五時から十八時半まで

場所 筑波大学 東京キャンパス 四三一会議室（四階）

助成

日本学術振興会 科学研究費補助金（研究課題番号24520093）  
日本学術振興会 外国人招へい研究者（短期）

パガニーニ氏は懐疑主義を初めとする西洋近世哲学の研究により国際的に知られる。二〇一一年にはその卓越した業績により、イタリアのアカデミア・デイ・リンチエイより同国において最高の荣誉とされる学術賞を授与された。本セミナーは、日本人大学院生による研究発表に対してパガニーニ氏が講評するという公開の《マスタークラス》形式で進められる。また、ベール研究からそのアカデミック・キャリアを出発させたパガニーニ氏には、イタリアにおけるベール研究の現状について、とりわけ《懐疑主義的無神論》を中心に報告いただく（日本語原稿配布予定）。セミナーはフランス語で行われるが、必要に応じて逐次通訳がつく予定。事前予約不要かつ無料にて来聴歓迎。お問い合わせは、津崎良典（tsuzaki.yoshinori.gn@tsukuba.ac.jp）まで電子メールにて。

